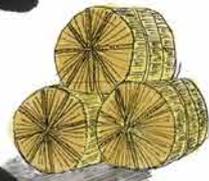
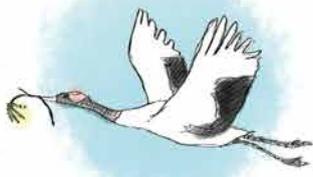


雨伊勢

民謡



南伊勢の
民話

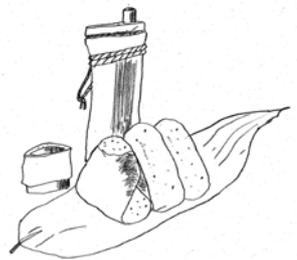
もくじ

第一章 旧南島地区 の民話	 新桑竈 2	 古和浦 4	 阿曾浦 11	 伊勢地 12
 その他 13	第二章 旧南勢地区 の民話	 五ヶ所浦 17	 船越 24	 切原 30
 中津浜浦 36	 飯満 40	 泉 43	 神津佐 46	 下津浦 48
 木谷 50	 内瀬 52	 伊勢路 57	 斎田 60	 始神 64
 押淵 (押測) 66	 迫間浦 70	 礫浦 72	 相賀浦 74	 田曾浦 77
 宿浦 79				

凡例

1. 本冊子は『南島町史』『南勢町誌』に掲載されている、民話の項を採録しました。
2. できるだけ原典に忠実に掲載しましたが、読みやすさを考慮し、適宜句読点や段落を多くし、新字体に変えたりするなどしています。

掲載：旧南島地区 9 話、旧南勢地区 88 話



第一章 旧南島地区の民話

卯年の春を迎え、筆硯を新たに、ふるさとの昔語りの稿をおこす。幸いに、ご愛読のほどを！

一 新桑竈

○姫越山に眠る黄金千両

〔朝日さし夕日直刺すつつじの下に 黄金千両 後の世のため〕

標高五〇三mの姫越山は、この地方では朝日をまっさきに迎える山であり、夕日を遅くまで受けて輝く山でもある。

この山の頂近く、つつじの根本に千両の黄金が眠っていることをこの歌は示している。

たしか昭和の初めごろ、この歌を手掛かりに、つつじというつつじは、根こそぎ掘り返されたこともあるのだが……

また、この歌にまつわる次のような話が伝えられている。

むかしむかし、この山路を老いたる武士を従えた、やんごとないお姫様が、あえぎあえぎ登って来られたという。

戦に敗れ、慣れぬ旅路の逃避行であったから、姫は疲れ果て、もはやこの峠から一步も動けないという様子であった。

せめて飲み水をと、従者の老武士が谷にくだり、竹筒に水を満たして戻ってみれば、哀れなことに姫はこと切れていた。この老武士も、もはやこれまでと、ここまで携えてきた軍用金を土中に埋めると姫のあとを追ったという。

この姫君は平家ゆかりの一族ともいい、姫越に近い芦浜に樋口次郎の墓が今も残っているが、一説には姫君はこの樋口の娘であったともいう。

樋口次郎は言うまでもなく源義仲の四天王の一人であるから、これではまるで源平合戦が物語の世界にまで延長された形である。

再起を期して軍用金を埋めたという類の話は、黄金埋蔵伝説として全国に数多く散らばっており、ご丁寧に歌までが似通っている。例えば「朝日さし夕日かがやく もろの木の下に うるし千盃 朱千盃伝々」など、うるしや朱は当時黄金に匹敵する貴重品だったのである。

埋蔵金物語となると、例えば武田信玄の埋蔵金、小栗上野介のそれなど生々しい人間の欲望が今に息づいている感じである。

ともあれ、南島町の西の端にふさわしく、ほほえましい物語ではないか。



二 古和浦こわうら

○黄金神像おうごんしんぞう

黄金は摩訶不思議な魅力をもっている。その魔力にひかれて織りなす人間模様が人の世の歴史というものだろうか。いろんな黄金伝説も、このあやしい魔力の中におのずから浮かびあがった願望でもあり、幻想でもあるのだろうか。

ともあれ、ここ南島町にも合わせて四つの黄金にまつわる話が残されている。

その一つは、姫越山の黄金埋蔵伝説であるが、残り三つはそろって黄金の神像、仏像の物語である。

●古和のせんげんさん

南島の各地に残る浅間山とせんげん祭り。それも過疎化の波にのまれて次々と姿を消していく。時勢のしからしむところと言うべきか。そのなかにあっても、古和浦と方座浦、神前浦、そして村山せんげんさんは、それぞれに独特の持ち味を今に伝えている貴重なものだ。方座のそれは、この村こぞっての規模でおこなわれる大祭りであり、昔ながらのしきたりを忠実に今に伝える貴重なものである。神前、村山のそれは豪宕華麗な点

で他の追隨ついでを許さず、古和のせんげんさんは祭りの模様もさることながら、黄金神像の物語を伝える点で別種べっしゆの趣おもむきをそえているのである。

「古和のせんげんさんは 大和やまとの宇陀うだで 今じゃどちらを向いてござるやら」

せんげんさんの祭の唄のなかで、こんな奇妙きみょうともつかぬ文句もんくが歌い継つがれているのである。伝えるところによると、かつて村の浅間祠せんげんしのご神体しんたいは黄金作りの神像であったという。むかしむかし、この地方へは大和からの商人がよく出入りしたが、それは置薬おきぐすりの行商人ぎやうしやうじんであったり、反物たんものを担になってくる呉服屋ごふくやさんであったりした。たまたま黄金神像うわぎの噂うわさを耳にしたそのうちの一人が、暮夜ぼやひそかにこれを懐中かいちゆうにおさめて大和へ持ち帰り、神棚かみだなへあげておいた。

翌朝あらためると、不思議なことに神像の向きが変わっている。なにげなく向きを直しておくわけだが、いつの間にか向きが変わっていて空恐ろそらおそしくなった彼がよくよく考えてみると、その神像の向きは直してもなおしても、我がふるさと古和の方を向いていたというのである。誰がどう伝えたものか、古和の祭り唄のなかでそのことが歌われるようになったのである。



奈良県宇陀郡某村うだぐんあるむらの村誌そんしで関連のある記事をみたと教えてくれた人もあり、志摩郡のせんげん祭でもこの歌が歌われると知らせてくれた人もある。黄金神像伝説うわさに彩いろどられたお祭りなんて、いかにも楽しいではないか。

○観音さまの夜歩きかんのんよある

古和浦の甘露寺、本堂に向かって左手に三間四面の観音堂が建っている。毎年一月には「五日堂」という奇祭がおこなわれ、二月には初午、とつづく土地の人たちにはなじみ深いところだが、このお堂のなかの仏さまにまつわる次の話は案外知られていないので、紹介する。

まずお堂のなかに入ってみよう。ご本尊はもちろん観音さまで、中央正面に莊嚴端麗なお姿で立たれている。その左下に黒塗りの大きな厨子が据えられていて、ふだんは扉が閉じられている。その扉を開くと不思議なことに前面いっばいに細かい金網が張られていて、なかにはご本尊よりやや身丈が大きいかと思われる観音さまが、左手に未敷蓮華、右手は上げて説法印のお姿で立たれているのである。

「どうしてかな」と子ども心に軽い不審を抱いた程度で深く詮索することもなく、それなりに月日が経ってしまった。ずっと後年になって、この物語を聞くにおよび、いっぺんにこの観音さまへの親近感を抱くようになり、訪れるたび、「ごきげんいかが」と語りかけたい気持ちである。

さて、古和浦の奥の大納町に納戸地という小字がある。そのさらに奥まったところに「寺屋敷」とよばれる地所があって、古和浦地誌草稿の『南堂寺廃寺跡奥納戸地山巔にあり』という南堂寺のあとである。山の頂

近くで今は松林まつばやしとなりヒノキの植林がされているが、そこへの登り道のある谷は水汲み谷みずくであり、向かいには「おぼちゃ谷（大墓地谷）、こぼちゃ谷（小墓地谷）」と寺にゆかりの地名ものこされている。納戸地なる地名もこの南堂寺にちなむものとされる。南堂寺はいつ廃寺となったかはさだかではない。

大納の人たちが甘露寺の壇徒だんととなり、ご本尊も引きとられることとなって、さいわい観音堂へ納められたのであろうが、昨日にかわる今日は我が身、ご本尊さまは客分きやくぶん（いわば居候いそうろう）の御身分ごみぶんである。待遇たいぐうその他、意にそわぬことが多く、もとの古巢ふるすの我が家恋しと、夜な夜な南堂寺のありかを求めて、野路のじをさまよわれたらしく、朝になると仏さまの足指が泥にまみれていたり、裳裾もすそに草の葉っぱがついていたりした。

おどろいた人々は「いくら探されても帰られるお家はなくなりました。どうかもう出歩きなさいませんように」と、さてこそ金網を張って観音さまの夜歩きを封じたという。実に人間味あふれる仏さまではないか。

○熊野の「海の大男」

いつのころだか、その年代はさだかではないが、熊野灘くまのなだの深い深い海底に「大男」が住んでいた。



それが今の世の「大男」とは、まったく丈がちがう。白い「仕事着」をつけてあらわれるかとおもうと、みるみるうちに美しい「お姫さん」になったりするのです。初めのうちは、その正体がかめなかったという。

しかし、海に働く漁師たちには白い着物の「大男」、美しい姿の「お姫さん」と呼ばれていたが、おそれられていたことは、たしかである。

ふだんは漁の邪魔をしないばかりか、天気の良い日には誰も見たことがないという。それは昼間は海底でうつらうつらと眠っているからかもしれない。ところが東南の風が吹きはじめ、海面に三角波が立ちはじめると、待っていたとばかりにむっくりと起きだして、海上にその姿をあらわすのである。海上にすさまじい雨や嵐を巻きおこすという点では、海に住む雷神でもあった。

海に働く人々には、東南の風を「魔風」と呼んでおそれた。どんなに晴れ渡った日でも、一度この風が吹きはじめると、漁師たちは帆をあげ、「ろ」を急ぎ、漕ぐことを忘れなかった。

今でも熊野地方では、二月と八月の不意に吹いてくる風を突風としておそれる風習がある。突風が吹いてくれば皆、漁師なら港へ逃げるのであった。しかし大勢の漁師のなかには、今日と違い、「ろ」で舟を漕ぐ時代であったから逃げ遅れる船があった。それをみると海の大男は、ここぞばかりに長い長い手をのばして、船をつかまえるほどであった。

この海の大男に船尾をとられてしまったら最後、船はにっちもさっちも動かない。そのとき、海の大男は雷のような大声で、「そのヒシヤクをかせ」と怒鳴るといふ。あわててヒシヤクをかそうものなら、海の大男、

馬力を出して船に海水をいっぱい、またたく間にいれてしまうから大変である。

船には船神をまつり、また、出船のときにはお祓はらいするのはこうした災難をうけた場合のお助けを願う漁師の信仰心しんこうしんからきている。熊野の浦々の漁師たちは、海へ乗りだすときにはお祓はらいをしたり、ヒシヤクを用意していくようになったという。そして突風にあい、逃げ遅れたときには、必ずあらわれる海の大男に底抜けしたヒシヤクを投げて与えることにしたそうだ。

いかな海の大男でも、底抜けヒシヤクとは気がつかない。一いっしよ所懸命けんめい、底抜けヒシヤクで船に海水をいれても、いっこう船は沈まない。いかに力が人間の千人力せんにんりきあっても、頭の弱いところもあつたのであろう。それから、海の大男は心細くなり、自分の及ばぬ力にきまり悪げに、こそこそ海底に姿を消してしまうようになったという。その後、長い歳月を経て、明治の代からでも百年間のあいだに帆かけ船や「ろ」で漕ぐ船が少なくなつて、船の機械化がすすみ電動化し、そのうえラジオなどの備えつけて天気予報をはやく知るようになった。このころでは海に働く人々のあいだに「海の大男」をみたという漁師が少なくなつた。

電灯のつかなかった大正時代初頭。わが里でのある夏の夜に、例の海の大男が山に上がったのか、古里山でこの海の大男にばったり出会って、失神した何人かの人がいる。それは山方の人であり、竈方の人であったりした。古里山は、大昔は古墳（ふるさと遺跡）のあったところである。

大正のはじめ、この山土を掘りおこしていたところ、一メートルも地下に「トクワ」に当たるものがある。みるとそれは長刀であった。掘りおこした長刀はサビでぼろぼろの、刀として用をなさぬもろさであった。そこで専門家の鑑定をうけたが、「古墳」つまり墓場に納めた守り刀であろうというので、元の場所へ埋めてしまったという。この話は今でも明治大正生まれの人々なら、生々しく伝わってくる、わが里の伝説である。

こうして里の人々や子孫へ語り伝えられる話を、「ふるさと山の伝説」として大切にのこし伝えたいものである。

そうした心は郷土をみなおし、故郷を愛する心を強めるとともに、昔の遠い祖先の心を生かし、心豊かな情けある人間を育ててゆくことになる。

ふるさと山は、古和浦祖先発祥の地であり、今日では古和一族の軍忠碑もたてられていて、古和一族が遠い昔に、国を守り天皇を守りぬいてきた尽忠の子孫であるという誇りを失わず、いつまでも守り伝えてゆきたいものである。



三 阿曾浦

○阿曾と相賀の境界

むかし阿曾浦と相賀浦とが、両村の領境を決めることになった。一番鶏の声を合図に双方から船を漕ぎ出して、両者の出合ったところを境界とすることに相談がまとまり、いよいよ当日になって船を漕ぎ出したが、出合った地点は阿曾浦のほうが海岸線がのびて、かなり有利な結果となった。

そのわけは阿曾浦に知恵者があって、竹の節を抜いたものを鶏の止まり木とし、それに湯を通して鶏の足をあたため、定刻よりもはやく鶏を鳴かしたからだということである。



○阿曾浦の豪傑

阿曾浦にたいそう力をつよい男があった。ここは漁村で、昔からかつおの一本釣りがさかんであったが、気の荒い漁民のこととて、他村の漁船との紛争がしばしばあり、海上で血の雨を降らすようなこともあった。

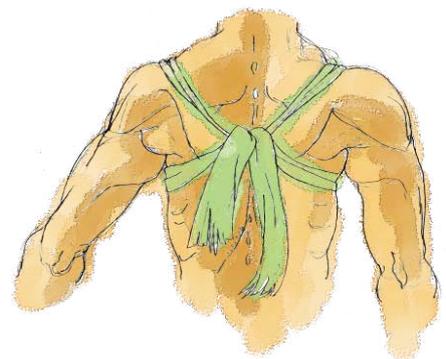
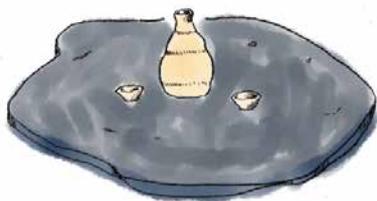
阿曾浦の漁船がよその船と喧嘩けんかになったと急報されると、この男はやにわに青竹あおたけを手で挫くじいてしごき、それをタスキにかけて「さア来いッ」と身がまえたという話が伝わっている。

四 伊勢地いせじ

○夫婦岩

南島町伊勢地の字オオガイトあざのトンダニ山林中に、「メオトイシ」といってあがめられている岩がある。大型のレンガを不規則に積み重ねたような岩が左右に並立している。その中間に小祠をまつり、メオト神社と称するが、土地の人たちは「メオトサン」と呼んでいる。この石は一段ずつ大きくなるともいわれている。

夫婦石めおとishiの少し下方にあたって谷があり、その平たい岩の上に小坊主がすわっていたという。それでこの谷を「小坊主谷」という名で呼んでいる。またあるとき、夫婦の岩が差しつ差されつして酒盛りをしていたという話が伝わっている。



ある人がここへ炭すみごもに編むカヤを刈りにいったところ、夫婦石が声を出して「鎌放かまほったれ、鎌放かまほったれ」といったそうである。

メオトサンは齒痛こうけんに効験こうけんがあるというので、よくお詣まいりにいく人もいるそうだ。

五 その他

○鼠群移動そぐんいどう

話者が一七歳くらいで、まだカシキすいじががり（船の炊事係）のころ。

遊木浦ゆうきうら（熊野市）の人がやっているサンマの大網おほなまに乗り組んでいたときのことである。

遊木ふるえや古江ふるえの岸から九里も十里もの沖合に出て、那智なちの山が見えなくなる海上で、サンマの大群を発見した。すぐさま網をおろし、追船が追い込んで網で囲んだが、よく見ると、サンマの魚群と見えしたのは鼠ねずみの大群であった。網を喰い破られては大変だと、あわてて鼠を追い出したが、鼠が群をつくって泳いでいたということは、いまでも不思議に思えてならない。

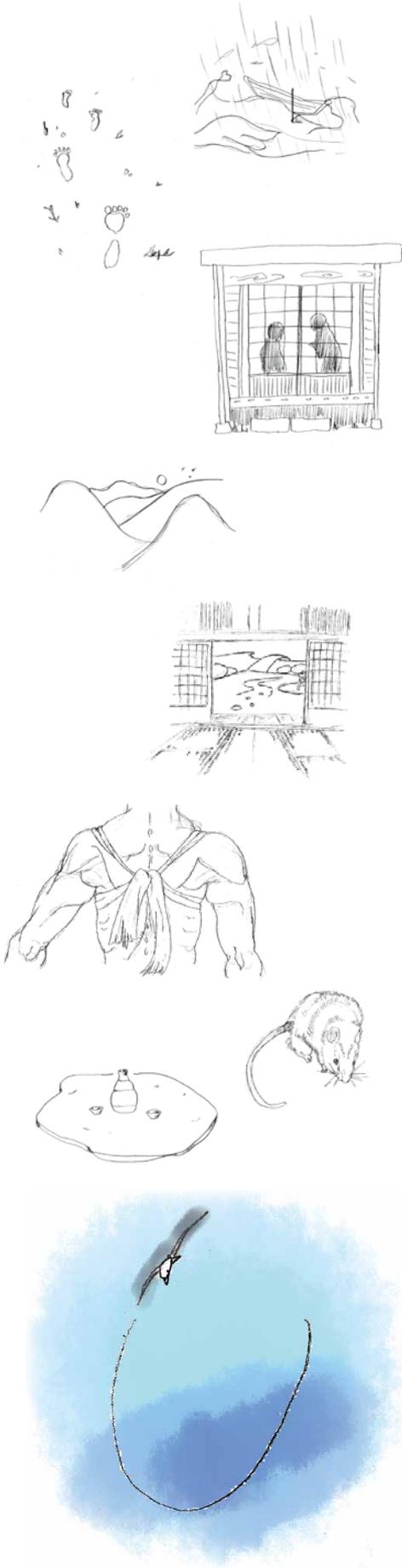


○ 船幽霊 ふなゆうれい

沖で幽霊船ゆうれいせんにあう話はどこでもよく耳にする。沖を漕いでいると、前方から大きな船がこちらに向かって進んでくる。あわや突き当たるかと思うと、前方の船は忽然こっぜんと消えてしまうという。

また、沖に出ていると海面に亡霊ぼうれいがあらわれて、「杓しゃくをくれ」という。船には飲料の水を四斗樽しとだるに入れてそなえているので、それを汲みだすための杓があるが、そのまま渡すと海水を汲み入れて船を沈めてしまうから、必ず底を抜いて渡してやらねばならないという。

このような海の魔を除けるために、船タテの際には檣かんか櫂かいの先端を、少しだけ焼いておくといいとされている。沖に出ていて大シケにあったときには、カモメに似た鳥が一羽、船について飛びまわっているものである、それを目にする、「青峰さんが護ってくれる」といって元気づくものである。話者は何回も経験した。



第二章 旧南勢地区の民話

ここに挙げるものは、多くの人々から与えられたものである。

したがって、聞き違い書き違いもあるうかと思われる。多くは伝承であるので、伝える人によって、そこに思わぬ差が出てくるのは当然である。

話の中には、我が里をよしとし、他村をさげすむ語調があるのはあらそえない。あるいは、嫌な感じも与えようが、当時の人の素朴な姿そぼくが読み取れもするので、いまさら、目くじらをたてるほどのこともあるまいと判断し、そのままに挙げた。

地名の由来などの話も多い。話の中には、歴史的な問題があるものも多い。注を付けて正す方法もあるが、せつかくの民話としてのロマンを壊すことになると思われるので、省くことにした。

かえってこれらの話から、当時の人々の考察の仕方や教養のほどもうかがわれてほほえましいものを覚える。いろいろのそばそばでそれを語る老翁ろうわう、老婆ろうば。それを聞く孫たち。こうして郷土のいろいろのことについて伝承が図られた姿こそ尊いもので、今日、最も薄らいでいるのは、この郷土きょうどの物語ならではのなかろうか。

現在の大人たちが、昔の人たちがしたように、それを子や孫に語ってあげたならば、親子の会話の少ない今、かえって大きな触れ合いが持たれるであろう。

一 五ヶ所浦

○牛鬼

五ヶ所浦の切間の谷に一つの洞穴がある。ここに牛鬼という変わったものが住んでいた。

牛鬼とは、古本『勢摩軍記』では、毎月牛一匹を食う鬼だったというが、後の本では、首から上は牛の頭をし、人間のようにものを言い、一日に千里も走る通力をもった強い鬼だったという。

この牛鬼は、よく西山に出てきて、五ヶ所城の殿様（愛洲重明公）が城中で弓の稽古をするのを眺めていた。ところがある日、弓自慢の殿様が、あろうことか、その矢を牛鬼めがけて放してしまった。矢は牛鬼の胸元へ当たり、牛鬼は西山の下の畑へ真っ逆さまに転び落ちた。

このときの牛鬼の泣き声はすさまじく、そのうえ、真っ黒な煙がもうもうと立ち上った。この煙におせんだ城主の奥方（後の本では浮舟とある）は毒気にあてられ、治らぬ業病をわずらうことになった。そのため、親元の北畠家へ養生という口実で帰され、あとから離縁を申し送られ、奥方はそれを悲しんで自害してしまった。この非道を怒った北畠家は、ついに軍を起こし、とうとう愛洲家は滅ぼされた。この牛鬼というのは、もともと五ヶ所城の主（守護ともいう）だったそうで、死に際に「自分を助けておけば、この城は末永く繁昌するものを」と言い残したという。

西山の「ウシマロビ」という地は、この牛鬼の転げ落ちた地である。また、住んでいた穴から東南四十メートルほどにある岩は、戸棚状とだなじょうをしていて、これを牛鬼の道具部屋と呼び、牛鬼が武器を隠していたところで、この辺りの樹木を切ると災いがあるという。

銚子谷ちようしだには、牛鬼の使った金銀でこしらえた長柄ながえの銚子ちようし、杯さかずきなどが埋められていて、地中から光を発している。近くからは見えないが、夜中など遠くの海上を通る舟から、その光が見えたという（『愛洲軍記』、『五ヶ所村誌』）『中京文化』は、重明しげあきが飯満左京之進におだてられて射殺しゃさつしたとし、牛鬼とは顔が牛、体が鬼の形をした怪物と記し、転び落ちたところを「ウシコロビノ谷」とする。

また、奥方については、テンケイ病（テンカンか）にかかった奥方に重明が嫌気がさして退け、京都から来た女（白拍子しらびょうし）を愛するようになったために、北畠氏と仲が悪くなり、奥方は世をはかなんで死んだともする。

この京師遊女説は、『森岡重宝記』に「京都ヨリ遊女ヲ呼び寄セ云々」とあり、『伊勢名勝志』に「既ニシテ京師ノ舞妓ヲ寵ス」とある。

なお、『中京文化』は重明は侍妾じしやうを寵愛ちやうあいしたため、北畠氏（の女）と離婚したともいう、とある。



〇ご免岩の雨めんいわ あま

正泉寺しょうせんじに義堂容演という坊さんがいた。ある年の夏、干ばつで困った村人が、和尚おしょうさんに雨が降るように祈きと禱を頼んだ。

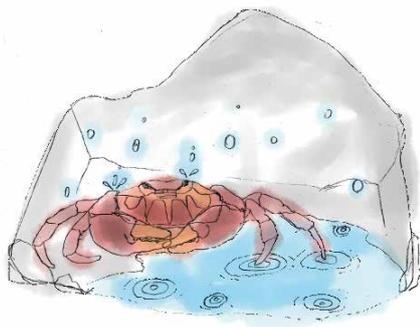
そこで「滝後たきじり」の奥で雨ごいをしようといってみたら、そこへ大きなカニが出てきた。これを見た和尚は、「お前がいてはしようがないナ」といって、祈禱をやめて引き返した。

次の日、あらためて飯満の先の「〇ご免岩」で祈禱することにした。その出がけに和尚は小僧にむかってこう言った。

「傘の用意をせい」と。

そばでこれを聞いた村人はびっくりして、炎天を仰ぎながらこの和尚、なにを言うやらと笑いあったというが、無理もなかったろう。さて舟をこぎ出し、目的地で祈禱をはじめ、やがて「エイツ」と掛け声して、持った払子ほっすを海中に投げ込むと、払子はクルクルと渦の中へ吸い込まれていった。そうすると空はにわかにかき曇り、大粒の雨がポツポツと、やがて大雨となってしまった。みんなずぶぬれの中で、和尚だけは傘をさして澄ましていたという。

今でも漁師たちは、ここを「ごめん岩」といって、避けて通るようにし、たとえ近くで舟をこいでも櫓ろがこの岩に触れないように注意している（聞書、『習俗調書』）



○正泉寺の梵鐘しょうせんじ ぼんしょう

元禄十五年、義堂容演の代にこしらえたものである。この鐘かねのてっぺんに九個の穴があけられているが、これには次のような話が伝えられている。

この鐘ができて、つきならされるようになったら、その音があまりに高く響き渡るので、浦方（浜辺）の漁師たちから苦情が舞い込んできた。この音で、海へ入ってきたイワシが逃げ出してしまうというのだ。

そこで、てっぺんに穴をあけて、音を和らげることにしたのだという（聞書、『習俗調書』）。



○よめぬ穴と御所島ごしよじま

南勢町立病院の上の畑に陥没地がある。昔から何度も陥没したようで、文禄検地帳ぶんろくけんちちょうの字地あざちにも、「よめぬ穴」とある。

「よめぬ」とは、「不審」「わからぬ」という意味のことで、その原因がつかめないの、その名を得たのだろうが、この下は石灰岩層せっかいがんそうで、地下水が走るところから、たびたび陥没かんぼつするのだと思われる。

五ヶ所では、ここが陥没し、代わりに御所島が出来上がったと話している。

○五ヶ所の魚売り

五ヶ所の者が矢持村（今の伊勢市）へ魚売りに出かけた。矢持は山村で炭焼きを専業としていた。

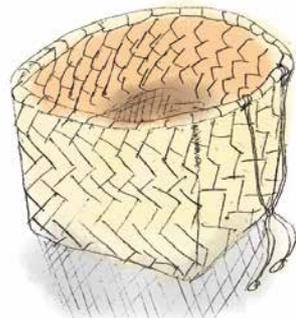
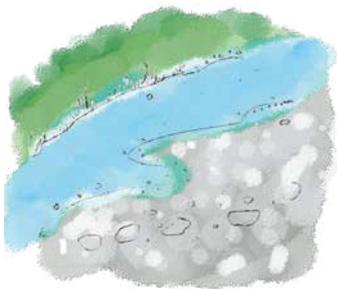
矢持の人が魚を取り上げて、「これは何という魚？」と聞いた。「スミヤキ」。「これは？」
「ヨコワ」（この村の字に横輪がある）。「これは？」。「テス」。「そんならこれは」と入れ物を指したので、「フゴ」と答えてしかられてしまったという（聞書）

○医王寺の薬師

五ヶ所に眼病に靈験あらたかな薬師さんがあると聞いた下総国の人、はるばるやって来て、まんまと盗み出した。たまたま信心深い幸作という人の夢枕に、この薬師が現れ「今、盗み出されて宮川筋みやがわすじに来ているから、迎えに来てくれ」といわれた。びっくりして寺を訪ねると、薬師堂は空だった。

急いで宮川へ行くと、盗人は居すくみになっていた、盗人は心から悔い、幸作もその罪を許してくれるように詫びてあげたら、盗人は動けるようになった。そこで盗人は髪を切り、坊さんの姿になって立ち去っていった。

これからこの薬師さんは、医者薬師と呼ばれた（『愛洲軍記』）。



○合神

五ヶ所と船越の境地をいう。昔、五ヶ所の神さまと船越の土宮の神さまが領地争いを起こした。そこで、鶏の鳴くのを合図に、その社から駆け出して二人の出会ったところを境界にしようと約束した。この二人の神さまの出合ったところなので、「合神」というのだ（『向洋』）。

○うそ平

五ヶ所に平右衛門という、うその名人がいた。ある日、山で仕事をしている人たちのところへ通り合わせた。人々はからかって、「おい平右どん、うそ言わんか」と言った。平右衛門は、「それどころか、今、庄屋しやうやどんの婆が死んで、はな（供花）^{くげ}とりに行くところや」といって、どんどん山へ上がっていった。皆の衆は、庄屋の婆なら放っておけないと、仕事をやめて家に帰り、着物を着替えて庄屋の家へ向かうと、庄屋の婆は、かどで洗濯をしていた。まんまと一杯食わされたのである。

あとで皆がなじったら、「お前ら、うそ言えといったじゃないか」と言ったという。



○あわて者の平吉どん

平吉どんが夜明けを待って田のあぜ刈りに行った。勢いよく草を刈りかけたら、鎌がすべって手(脚ともいう)に飛んできた。「こりゃ大変だ」と、傷口もよく見ないで手ぬぐいでしばりあげ、家へとんで帰った。そして「カカよ、えらいことしてしまった。鎌で手を切ってしまった。マア見てくれ」といって自分は横向いて傷口をカカに見せた。

カカが手ぬぐいをとってみたら、手の甲には、雨がえるがつぶれていたんだと。それから、ふと足元を見たら、片方しか脚絆きやはんが巻かれていなかったの、あたりを見回したら、もう片方は縁台の脚にしばってあるんだと。

朝、縁台に腰かけて脚絆を巻くおりに、片方は自分の足に、片方は縁台の脚にはかしたんだと。

そのうえ、腰に差していた鎌をみたら、碾臼ひきうすの手だった。それだから草は刈れずに、草の上をすべっただけのことだった。

ある晩、月が西へ傾いて明かり障子を照らしたのを夜明けと間違えて飛び起き、そばに置いてあった猫火鉢ねこひばち(こたつ)をもって、海岸まで走った。網を引っ張り、つないであった舟を寄せて飛び乗ろうとしたところ、海面に写った舟の影の方へ飛び乗ったので、勢いよく海へはまってしまった。

そうしたら持っていた猫火鉢は、家で飼っていた猫だったので、猫もびっくりして、平吉どんの顔をかきむしってしまった。



二 船越ふなこし

○龍仙山の鬼りゅうせんざん

おかし、龍仙山に鬼が住んでいた。この鬼は自分らの里人との境界をつくろうとして、村人をかり出して働かせた。

こうしてつくられたのが、いま残っている神籠石こうごいしだという。

昼になると里人たちは持ってきた弁当をとったが、鬼共は懐中かいちゆうから人の腕を取りだし、ポリポリとかじっていた。時によると、沖を通る船を見つけてはこれを襲い、乗組の人をとらえては食うという恐ろしいものだった。



○白馬の瀧（駆け足の瀧）

龍仙山の裏側稻石にある。朝比奈三郎という侍が、白馬に乗ってここを通りかかり、誤って乗馬のまま道の下の瀧たきつぼに落ちて死んでしまった。一説では敵に攻めたてられ、かなわなくなつて、白馬にまたがったまま、

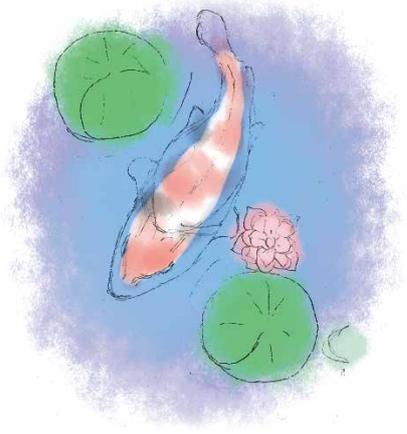
滝つぼに入水してしまったともいう。

それからは、この瀧の附近をとおると、白馬が滝つぼに浮いて見えたり、また、大晦日おおみそかの夜になると、白馬がこの辺りを駆け巡るようにもなった。そこで、白馬瀧、駆け足瀧と呼ばれるようになったが、それらを見た人は必ず若死するといわれる。

伊勢路の奥に、踏掛、倉掛、的場などという地名があるが、そこは朝比奈三郎修行の地といわれる。

○岩船池の主

龍仙山の山頂附近に、岩船石という岩があり、そのまた近くに小さな池がある。この池には片目のコイ（一説には、片目のボラ）がいた。この池に近づいたり、この池の主を見ると、目がつぶれると伝え、今もこの附近ふきんに近づく者はいない。



〇おめき岩

五ヶ所中学校の東側の登り坂の右側にある岩を「おめき岩」という。

昔、船越の城山に住んでいた城主（普通「城山どん」と呼んでいる）が、横暴を極め、「あれもってこい」「これもってこい」と気ままにいうようになった。困り果てた住民は、御堂に集まって会合を開き、城山どんを殺そうと決めた。

ある日、城山どんが五ヶ所方面へ出かけた帰りを、この岩陰で待ち伏せ、石を投げおろして殺してしまった。このとき、「城山どんが来たぞ！」と、この岩で叫んだ（おめいた）ので、いまの名がついた。

ところがその後、村に伝染病がはやり、一時は村が絶えそうにもなった。占ってもらったら、「城山どん」のたたりだと言われ、「これはえらいことをしてしまった」と悔やんだ村人たちは、おわびに碑を建てて供養したら伝染病は収まってしまった。いま、船越公民館前庭の隅にある宝篋印塔はそれであるとも伝えられる。

〇幽霊畑（ゆうれんばたけ）

昔、船越から富士登山に出かけたときのこと。畑普請をやりかけたままで行に加わった人がいた。ところが、



登山の途中、あらしに遭って一人行方不明になってしまい、とうとう帰ってこなかった。

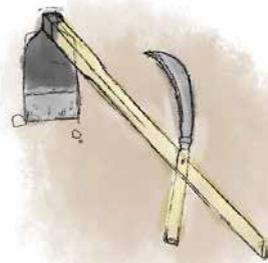
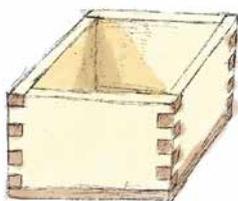
ところがある日、この人が突然に北口から帰ってきた。そしてそれ以来、やりかけの畑普請に精を出し、一反余りを開墾し終わったら、スーツとどこかへ行ってしまった。

それ以来、里人はそこを「ゆうれんばたけ」というようになり、その家の子孫は富士参りには参加しないという（聞書）。

○喜惣次の直訴

昔、船越に悪庄屋あくしやうやがいた。わざわざ大きな「枘」ますをこしらえて、年貢はこれで取りたて、田丸の代官へは正規の「枘」で納め、差額をもうけていた。郷民ごうみんは気づいていても、庄屋を恐れてだれも申し出る者はなかった。このとき、喜惣次というのは、日ごろは酒を飲んで将棋や碁ばかりしている男だったが、龍泉寺りゅうせんじの純叟じゆんそう（七代）という和尚さんと相談し、代官所だいかんしよへ訴え出た。そこで庄屋のごまかしがばれて罰せられたが、喜惣次も越訴おっその罪で罰せられてしまった。

それで村人たちは喜惣次の恩義に感じ、地蔵さんを建ててこれを祭ったが、庄屋の家だけはこれに参らないという（聞書）。歴史上は純叟は一七九二年没、喜惣次は一八〇八年没。



○よのけ谷

いつのころからか、船越の牛が八〇頭も死ぬということがあった。キュウリやウリを食べなかった二軒の家の牛が助かったただけだという。

その牛を墓地に埋めることになったが、なにぶんたくさんのため、ここに埋めきれずに、残ったものをしおみだい潮見台の横の谷へ埋めたので、ここを「よのけ谷」というようになった（聞書）。

○なしが谷（内侍谷）

船越、内瀬の境の谷を「ナシガタニ」というが、これは「内侍谷」（ナイシガタニ）の転訛てんかしたもので、昔、貴人、内侍の隠れ住んだところといわれる（聞書）。



○花川（はなご）の井戸

字花川にある。三か所に区分し、上手は神供井と呼んで、お供えそなの水をくむところ。中ほどは、一般住民の用水。下方は雑用水としていた。昔からこの井戸の水を飲むと、鼻が悪くなるとか、声が鼻にかかるようになるとかいわれた。

おそらく、地名の花川（はなご）から生まれたものであろう。

○土宮つちのみや

楠部鹿海（かのめ）の祭神さいじんが洪水で流れて漂着ひょうちやくしたのを祀まつったという。その流れ着いた岩は、霊岩としてあがめられた。祭神は埴山はにやま姫命ひめのみこと。天照大神あまてらすおおかみの乳母うばともいわれ、これに祈願すると母乳に恵まれるとあって、婦女子の信仰が厚かった。

このため船越ではお産で死ぬ人がなかったという。

和歌山藩主南龍公わかやまはんしゅなんりゆうこうが、この地を巡視じゆんしに来た際、船越峠で乗馬が立ち止まり、どうしても動かなくなってしまった。恐らくこれは、近くに何かがお祀まつりしてあるにちがいないと調べさせたところ、土宮のあることを知り、そ



こで高二石余を下されるようになった。

また、紀州公きしゅうこうが輩下はいかの者を視察に派遣したところ、この辺りで馬がどうしても進まない。そこで、「この辺に尊よつこい神様を祀ってはいないか」と尋ねたところ、附近の人が「天照大神の妹の埴山という神が祀られている」といった。これを聞いて「それだ！これからは稲木峠のこちら側（東側）を土宮の領地にしてくれ」といったら、馬はトットと駈け出したという。

三 切原きりはら

○飯盛山の鐘

盗賊が飯盛山の鐘を盗みだし、山から引きずり出してきた。切原在所の人たちは、盗賊を恐れ、かわりを嫌って家の戸を閉じ、中では耳を覆って知らぬふりをしていた。そのため、この辺りの人は耳が悪いのだという（聞書）。鐘は船に積み込まれたが、誤って海に落とされてしまった。後に、その鐘が中津浜浦なかつはまうらの漁師の網にかかって拾い上げられた。この因縁いんねんから正月の鐘のつき始めは、中津浜浦なかつはまうらの人がするようになった（聞書）。

網で鐘を上げたのは、阿曾あその漁師ともいう。

○仁兵衛・儀兵衛のこと

重税で村人が難儀するのを見かねた小山仁兵衛正重は、叔父儀兵衛と一緒に面願じきそ（直訴か）のため大阪に出た。そのため二人は入牢され唐犬攻めにあわされた。ところが、儀兵衛は蹴まりの技に長じていたので、かえって犬を蹴り殺してしまい、自殺を仰せつけられた。時に慶長一八年一〇月という。

しかし、この面願によって慥たしからくみ柄組五三村が減税された。切原では、このため盆の念仏には、最初にこの二人の供養をする（『五ヶ所村誌』）

この念仏のとき、ついでに仁右衛門の念仏を唱えるが、これは時の田丸城主たまるじょうしゅの稻葉淡路守いなばあわじのかみのりみち紀通の家老、村田理右衛門のことではないかといわれる。この訴えに陰で援助した人だという。両名の墓は、いま、岡出おかくての墓地に建てられている。

○ホーロク岩

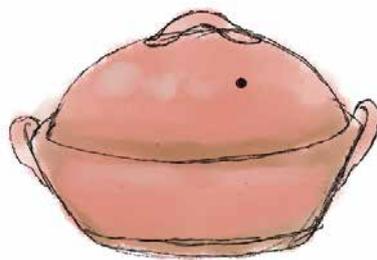
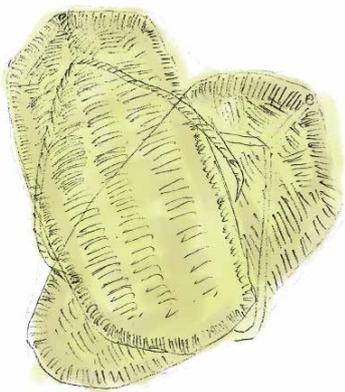
五ヶ所から切原への旧道は、五ヶ所川の東側を通っていた。その道の上に覆いかぶさるようになっていた岩があった。



切原の人が五ヶ所でホーロクを買い、頭上に載せて帰る途中、この下でその奇怪な岩をふと見上げ「この岩が落ちてきたらこのホーロクはどうなるう」と心配になった。途端に恐ろしくなってしまう、大急ぎで立ち去ろうとしたところ、つまずいてホーロクを落とし、めちやめちやに壊してしまった。それから、この岩をホーロク岩と呼ぶようになった（この岩は昭和五五年二月一五日、崩落してしまった）。

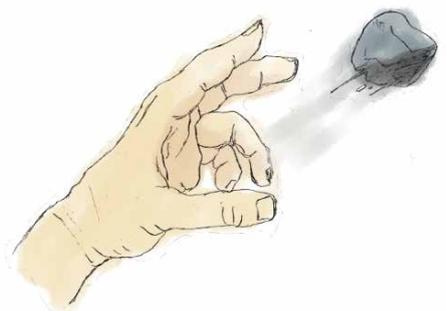
○引法石こうぼういし

奥の広にある。この石の表面にある、わらじの跡や、そのわらじから出た五本指の跡あとがよく見え、その跡にたまった水をいただく者もあった。この石には「シメ」も張られ、近くに良水りょうずいの井戸もあった。ヤマモモの木があったところはこれが日陰をつくり、その跡もよくわかっていたが、この木が枯れてからは、はっきりしなくなった（聞書）。



○命石（メイシ）

フカクズにある。飯盛山参りの盛んなころは、この石の上へ小石をほうり投げ、小石がうまく載れば、思い事がかなうといわれたものである（聞書）。



○刈屋川

婦女が月経のときには仮屋を建て、この川で潔斎する風習があった。それからこの川を、「仮屋川」と呼ぶようになったが、いつしか転訛てんかして刈屋の字を当てるようになった（『五ヶ所村誌』）。

○白瀧

まわりを奇岩や老樹が取り巻き、幽寂ゆうじやくの地である。近くに不動尊ふどうそんが祀られており、「不動瀧」ともいわれる。干ばつが続くとこの滝つぼへ飛び込み、塩で清めて「雨ごい」をする。



○堂広（どびろ）

切原神社のあった裏の方。昔、ここに薬師さんが祀られていた。ところが虫送りの火が飛んで、泉の薬師さんを焼いてしまったので、代償にこの薬師さんを泉へ差し出してしまったんだと。

ここの大岩の下に、宝珠ほうじゆ、あるいは、宝が秘蔵されているから、掘り起こしてみようという金鶏伝説きんけいでんせつがある（『切原郷土史』）。

○銭塚

浅間山へ登る道の近くにある。この下方を泉へ行く道が通る。そこでその道へ架かる橋を塚下橋と呼んで、早くから塚のあることが知られていたらしいが、由来ははっきりしない。

『五ヶ所村誌』では、「愛洲遺臣の墓あいすいしん」とも称している。昔、ここから、刀が出たともいうがはっきりしない（聞書）。
銭塚ともいうのは、かつて一文銭いちもんせんが沢山出たからだという（聞書）。

昭和五〇年、五五年と、しばしば盗掘とうくつにあっているが、出土品ははっきりしない。

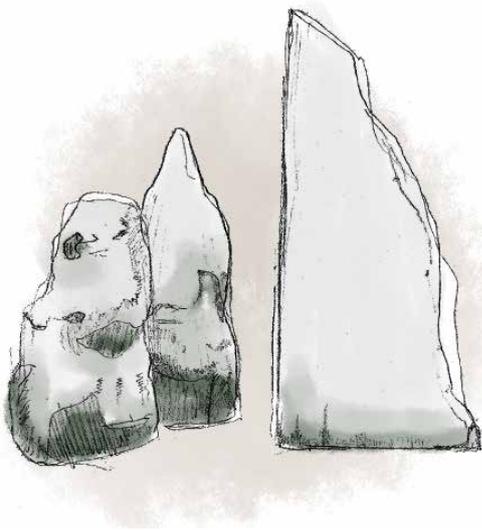
○劍峠つるぎとうげ

明治二三年、ここに伊勢へ通じる道ができた。八柵宜山の尾根に剣のような岩塊のあるところから、その名が出たという。

ある新聞に、「天照大神があまてらすおみかみここより熊野の海を見てあまりの美しさに剣を落とされたから」とあったが、その出所は不明である。

ここは、敗戦後、村上元三むらかみげんぞうが新聞に連載した『佐々木小次郎』に登場する。ここでは、小次郎が宇治の楠部太夫の家に宿泊しているころ、その娘おまんを鞍くらに乗せ、大場甚内一味の追撃ついききを避けて、払暁ふつきょうの五ヶ所街道を南下する際、一時傷の手当をするために休憩した地としている。

そのためか、一時ここにある小池のそばに、佐々木小次郎が血刀を洗った池との掲示があったと聞かすが、小説にはそんな描写はない。まもなく撤去されたのか、その後、この伝承を聞かない。



四 中津浜浦

なかつはまうら

○風呂の井（阿弥陀湯）

昔、里に阿弥陀堂あみだどうがあり、行基作という阿弥陀如来あみだによらいが祀られていた。そのかたわらには浴場が設けられており、阿弥陀湯といわれていた。紀州辺の人が伊勢参宮するときは、舟を五ヶ所へ入れ、切原越えで参宮さんぐうし、帰りに中津浜浦へ立ち寄り、阿弥陀如来を拝み、次いでこの湯に入って帰ったものという。

後、火災のため廃絶してしまったが、井戸の遺跡は残り、阿弥陀仏は玉傳寺ぎよくてんじに移されている（『五ヶ所村誌』聞書）

○弘法池

長浜と大間とに池がある。弘法大師こうぼうだいしが諸国回りしよこくまわりで東の方「三河の宮」まで行ったところ、この辺りはあまりに盗人が多いので嫌気がさし、西へ引き返し、途中、中津浜浦へ立ち寄った。この二つの池は、その際の弘法大師の足跡でできたもので、長浜のは右足、大間のは左足の跡である。

大間の池は、雨ごい池といわれ、干ばつときには、笠をつけて池の周りをまわり、雨ごい行事をする。長

浜には菖蒲が生えていて、五月五日の節句には、それで輪をつくり、頭や腰に巻き、神棚に供えもする。

○船越との境界争い

両郷は境を決めるのにもめた。そこで話し合いの末、朝の一番鶏の鳴くのを合図に両方から出発し、両方が落ちあった場所を境界にしようということになった。

ところが、船越は鶏を夜中にたたき起こし、無理矢理に鳴かせて暗い中に出発した。そして中津浜浦の民家近くまでやって来てから、「はよおきなしゃれ」「はよおきなしゃれ」と声を掛けた。その声で初めて目を覚ました中津浜浦の人々は、これを見てびっくりしたが、どうしようもなく、「もうちょっと下がってください」「もうちょっと下がってください」といって何度も頼み込み、やっとナガセというところまで引き下がってもらった。そこで「長瀬」が境界線になったんだといわれる。

一説では、中津浜浦の藤井という人が、船越の人が来るのに気付いて、あわてて中津浜浦の人たちを起こしたのだという。

さらに一説では、中津浜浦は鶏が早く鳴くようにと水を飲ませたが、飲ませすぎて鶏が鳴かなかったので寝坊したのだともいう。



○茶臼島ちやうすじま

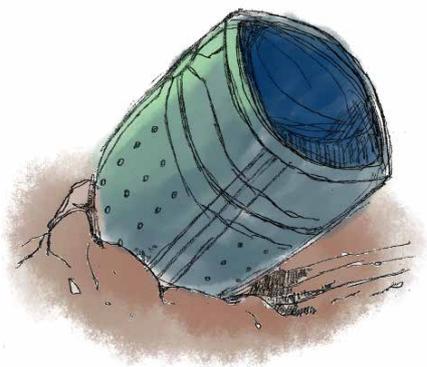
海の真ん中にポツンとある島で、今、中津浜浦の弁天べんてんさんが祀まつられている。呼びやすいように「ツブリコ」
となったというが、「ツンブリコ」とも呼ばれる。古い地図では、「ツラコシマ」「ツツラ小島」「ツツ島」など
とある。『村誌』に「大漁島」とあるように、このあたりは良い漁場であった。

中津浜浦と五ヶ所浦とは、海面の取り合いから、お互いにこの島をおれのものだと言い張って譲ゆずろうとしな
かった。とうとう中津浜浦は、「そんなにいるなら、この島持っていったらよかんこ」といった。それで五ヶ所浦
がまいてしまったんだと伝えられる。

一説では、そこで五ヶ所浦は島に網を付けて引っ張ったのだという。島の頭の方がちよつとだけ五ヶ所浦の
方へ傾かたむいているのは、そのためなのだといわれる。

○鉄てつのじんろく・鋼はがねのまさぞう

今から四代ほど前の人で、とてつもない強力の人だったという。名古屋城の堀の外
から、中へ向けて釣り鐘をぶち込んだのだと。



○長浜ばばあ

昔、長浜の山がまだ深かったころ。ここに、古ギツネ(古ダヌキともいわれる)がいた。人に危害は加えないが、山道をくらまして、田んぼに落としたり、肥だめへはめたりして、人に悪さをしたので、これを「長浜ばばあ」と呼んだ。

○ヤツタの鏡

中津浜浦は、船越ふなこしから六軒分かれて来たのが始まりで、これからだんだん分かれたのだという。この六軒の家には、「ヤツタの鏡」が伝わっていた。手鏡のような形をし、背面に模様もようのあるカネの鏡だという。今も実際に持っている家がある。



五 飯満はんま

○地名のいわれ

昔、倭姫命やまとひめのみことが天照大神を奉じて各地をまわらされたとき、この海岸へ立ち寄られた。海辺の南崎で休まれ御飯ごはんの仕度にかかった。釜でご飯を炊いていると大波が打ち寄せて来て、炊いていたご飯をさらって行ってしまった。だが、二度目の波でそれが打ち寄せられ、浜一面にご飯が打ち上げられてしまった。それで「ご飯が満ちる」といって、「飯満」といわれるようになったのだといわれる。

この浜からは、米石といって米粒がいくつも固まったような珍しい石が拾われる。

○飯満・五ヶ所浦の仲たがい

昔は両村の仲が悪く、両村の人たちは結婚すると不具者ができるといって、結婚しなかったものだといわれ、そのいわれはいろいろに伝えられる。

① 飯満の城主飯満左京進という人は、五ヶ所浦の愛洲家あいすけの一の家老であったが、愛洲を裏切って北畠氏きたばたけしへ

内通ないつうしたからだという説。

② 飯満の人たちが、愛洲さんのいる上空には、いつも鶴つる（鷹たかともいう）が三羽舞っているんだと北畠氏に教えたので、これが手掛かりで、愛洲の殿様の居場所がわかり、ついに滅ぼされてしまったからという説。

③ 飯満の殿様が愛洲のお姫様に懸想けそうし、とうとうこれをさらって飯満の寺へ隠してしまった。それを知った愛洲の殿様が飯満へ取り返しにやって来て、両方が戦争したからという説。

④ かつて愛洲の殿さんが敵に追われ、飯満半島のお寺の縁の下に逃げ込んだが、住職の密告により捕まった。このとき以来、飯満と五ヶ所の仲は悪くなり、縁組えんぐみをすると不具や片目になると、人々はそれを避け続けた。てきた。

これらは、五ヶ所浦側の話だが、飯満では次のように伝えている。

飯満の殿様は、飯満左京進時政つとむねといって、愛洲城の家老職を務め、水軍の指揮をとっている人であった。もともと、北畠から愛洲へ嫁に来たお姫さまの付き人としてついて来た人だという。その姫が難病にかかったのに、愛洲の人たちがかえってこれをいじめるので、これを北畠へ言いつけてやった。これを知った愛洲の人た

ちは、カンカンに憤おこって飯満へ押しかけ、飯満を焼き払ってしまった。殿様は鶺うがた方の「あさの」まで逃げたが、ここで殺されてしまった。愛洲も翌年、北畠に滅ぼされてしまった。

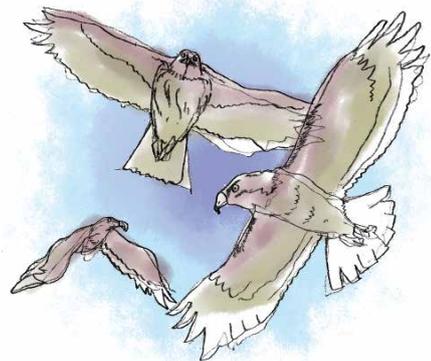
五〇軒もあった飯満の住所は、あらかたあちこちへ逃げてしまい、後へはわずかしか残らなくなって、今のような小さな村になってしまった。

○ばくち和尚おしょう

檀家だんかの人を誘っては、いかさまばくちをやっているばくち好きの和尚さんがいた。

そのころ飯満では、一千両になったら、四国の金毘羅こんぴらさんへお参りしようと、楽しみながらお金を積み立てていた。それがあともう一〇〇両ぐらいというときになって、この和尚、飯満の人たちを誘ってばくちに出かけ、大もうけしようとして、いかさまをやってしまった。

ところがこれを見破られ、ため込んでいた四国参りの金をほとんど取られてしまった。今、飯満の土地に中津浜浦の人たちの農地があるのは、その後始末のために売ってしまったからだそうだ。これに懲おこりた飯満の人たちは、それからはばくちに手を出さなくなっただという。



六泉いずみ

○七日島なのかじま

泉の海岸にある大きな島で、干潮時かんちようじには渡って行くことができる。その名の由来ゆらいは、次のようにいろいろ伝えられている。

① 干潮のとき、この島へ渡った人が、さて帰ろうとしたら、満潮まんちようになっていたため、道みちを失ってしまった。これは道を間違えたのだらうと、別の方を探したがわからない。こうしてグルグル回って七日間なのかかんもさまよったところ、七日目にやっと引き潮にあつて、初め渡った道がわかり、帰り着くことができたところから、七日島の名が付いた。

② 平氏の一党がここにたどり着き、七日間ひそ潜んでいたからだ。

③ 島の周囲を歩くと、七日かかるからだ。

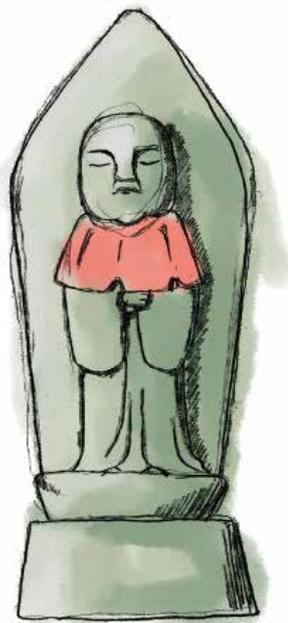
○首切岩

五ヶ所と泉との旧街道、地蔵坂にある岩についていろいろに言われている。

① 昔、愛洲軍がここで奮戦し、北畠軍の首を多数とってさらし首にしたところから、その名が出、旅人がここを通るときは、念仏ねんぶつを唱となえて走り去ったという（『愛洲軍記』）。今も岩に血のあとが残るといふ。

② 愛洲の城の処刑場しよけいじょうのあったところかともいう。

③ 泉では、首が祀まつってあったところとか、また、追いはぎが隠れていて、旅人の首をはねたところと伝えられている。この岩は、頭の方に亀裂きれつが入ってくびれている。



○三本松

三本松のところは、平生へいせい近寄ちかよってはならぬといわれていた。ところが、ある人が休みの日にここへ出かけてみたら、大きなシカが出てきていた。これから「シカ岩」といわれるようになった。

○あかさき

ここは泉いずみと神津佐かみづさの境で、両郷りょうごうで取り合いをした場所という。お互いに自分の所と言い張ゆずって譲り合あわないので、とうとう裁判さいばんを仰あおぐことになった。ところがその白洲しやうぢやで神津佐の庄屋しやうぢやが、「泉のあかさきは、神津佐のものでござる」と言ったばかりに、泉のものに決着けつちやくしたという。

近くに庵屋敷いんやしきというのがある。かつ地藏堂ぢざうだうがあったが、明治一五年ごろ、潭月和尚たんげつわうしやうの代に、宝光寺ほうこうじの境内けいだいへ移転改築いせんとくかいしきした。訴訟そしやうがあったのは元禄げんろくごろという。



七 神津佐

○神津佐のカラス

「泉・神津佐はカラスも鳴かぬ。飯満かわいや鶴つるが鳴く」という里謡りやうがある。普通には、「泉・神津佐はカラスさえ鳴く気が起こらぬほど寂さびしいところだ」というように解釈かいしやくされているが、本当はそうではないといわれ、ほかに、次のような解釈がある。

① 泉も神津佐も、水に恵まれているので、いつも豊作が続き、ここではカラスもエサを探す必要がない。だから腹を減らして鳴くこともないし、エサのありかを仲間に知らせる必要もないことを歌ったものだ。

② 「飯満かわいや鶴つるがなく」というのは、飯満から神津佐に、鶴という名の娘（一説に男衆おとこしやう）が働きに来ていたが、泉神津佐の食物の豊富なのを見るにつけ、飯満の家族らは、今ごろなにを食べているのだろうか、つい思い出しては泣いていたのを歌ったもので、初めは「飯満かなしや鶴つるがなく」と歌った。



③ 泉・神津佐でエサを食べていた鶴が飯満へ移って来たら、そこにエサがなかったので、鳴き出したのだ。

○キツネ封じふうじ

昔、「おさだギツネ」というキツネがいた。身体の弱い人を見るとよく取りついた。取りつかれた人は、わめいたり、歌いだしたり、奇妙なしぐさをする。村人たちはキツネに取りつかれた人が死ぬと、キツネがそのはらわたを食べるのだといって怖がっていた。

そのころ、神津佐に徳住という坊さんがやって来て、村人がキツネに取りつかれて困っているのを見て、「おれがキツネを封じてやる」と言って、大きな「南無阿弥陀仏」という石碑せきひを建て、墓参りごとに地下中にお参りをさせ、

また、毎月旧一五日の晩、各組ごとに「南無阿弥陀仏」の掛図かけずを掛け、線香一本が燃えるあいだ、念仏を唱えさせるようにしたら、キツネはいなくなったという（聞書）。



○愛洲滅亡

五ヶ所の愛洲が逃げ込んだのは、神津佐の法泉寺ほうせんじという。このときに法泉寺が焼失したという（聞書）。



八 下津浦

○飛枡大明神

享保年間、下津浦の里から出火し、部落の大半を焼失した。このとき、寺も一部類焼したが、そのどさくさに寺の米びつにあった一升枡が行方不明になってしまった。枡が米びつから抜け出すのは不思議なこととされたが、その火事の後始末をしていると、峠畑の茶の木の前で見つかった。

あまりの不思議さに、村人たちは、火伏せの神の秋葉神社のご神体にし、「飛枡大明神」といって、床浦に祀ることにした（聞書）。



○五輪坊

字エボシにある。この辺一帯が山火事にあつたとき、モッコクの木が焼け残り、初めて円型の墓地が見つかり、それから祀られるようになった。

ここには朱が埋められているとか、また、ここは平家の落ち武者が割腹したところだとかいう。ここへ参ると、

喘息が治るとか、イボが取れるとか言われる（聞書）。

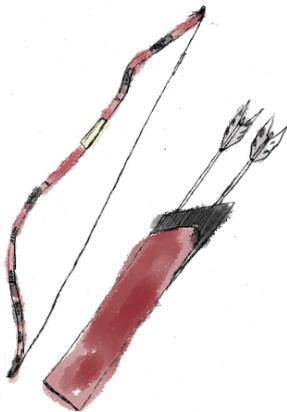
〇八幡

天正の末ごろは、下津浦は二〇数軒ぐらいの小さな部落で、塩を焼いていた。そのころ、雪の降るある寒い日に、熊野海賊の一団が塩の集荷場メノ浜にやって来て、塩五〇貫を出すように庄屋に掛け合った。もし出さなければ、娘や子どもを連れ去っていくという。

無力な村民は寺に集まって、恐れおののきながら善後策を話し合ったが、もとより良策は出てこなかった。すると時の庄屋森井太郎左衛門は黙って立ち上がり、家から弓矢を持って来た。

そして八幡の境内から、海賊の頭目めがけて一矢を放ったところ、見事命中した。海賊共はこれに恐れをなし、逃げ帰ってしまった。海賊の頭目はその場へ葬られ、その石塔が、今もメノ浜の井戸のほとりにあるという。

その日は、旧正月の二〇日だったので、このことからこの日に弓矢のお祭りをするようになった。



○長光寺の踏石ちようこうじ

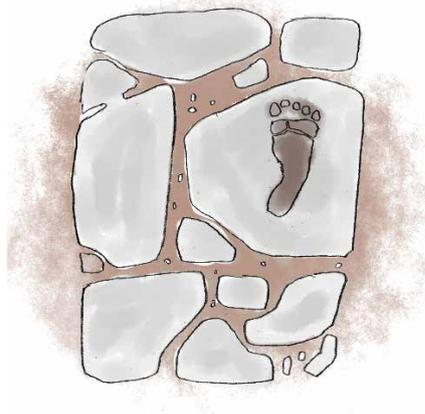
長光寺ちようこうじにもものすごく力の強い和尚さんがいた。やっと二人で持ち上げるような石でも、一人で軽く持ち上げるような大力の人であった。

ところがこの和尚さんも、寺へ遊びに来る腕白坊主わんぱくぼうずの子どもたちには手を焼いていた。とうとうある日、我慢できなくなった和尚が、言うことを聞かない子どもたちを追いかけまわしているうちに、寺の縁の敷石しきいしを大きい足で力強く踏みつけてしまったところ、その足跡がその敷石の上に付いてしまった。その踏石は今も本堂の横にある（聞書）。

九 木谷きだに

○小田の磯石

木谷と宿浦の境、小田ノ浦の磯には、立派な石があるが、それを採るとたたりがあるといわれている。明治四一年、木谷の人がそれを採ったら二年間も大病した。



昭和十一年に、礪浦の土木請負人が中津浜浦の突堤工事にこの石をつかったら、工事完成の前日、船上でその石に襲われて即死した。

第二次大戦中にも、礪浦の請負人がこの石で工事をし、工事完成を前に大石の下敷きになって死んだという。

○鳴浜（木谷産土神）

天文元（一五三二）年、中津浜浦の人たちが木谷の地先西海岸で地引きをしていると、網に奇怪な石がかかってきた。不審に思い、その石を海岸へ上げておいた。

その石が、「おれは産土神になる石体だ」と連続して木谷の人の夢枕に立つんで、これを潮際に建てて祀った。ところがある日、西浜でしきりに大きな音がし、光を放って東方の山へ飛ぶものが見えた。西浜に行ってみると、祀っていた石がなくなっていた。探してみたら東奥の山にあった。そこでその地をならしてここに安置することにした。

これから西浜を「鳴浜」といい、東奥を「石光浦」と呼ぶようになった。

慶長八年一〇月三〇日の神遷式から、中津浜浦では、石が網にかかた際に疎略に扱ったおわびとして、御造営ごとに生魚七荷半を供えることを約束したという。

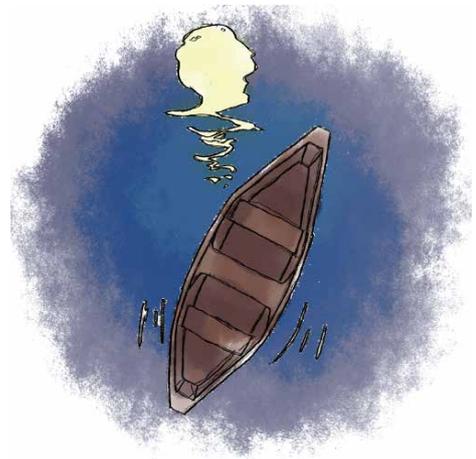
これは明治末の神社合祀で神原神社へ移されたが、この御神体は、時がたつにつれて大きくなっていく石だという。



○琴ヶ島ことがしま

寿永じゆえいの昔、平氏へいしが西海から落ちのび木谷浦きだにうらへ隠棲いんせいしたが、風流を尊んだ公達が、月夜に舟を浮かべてはこの島へ渡り、琴を弾じたところからその名が付いた。

「行こか木谷へ、帰ろか宿へ、ここが思案の琴が島」という俗謡ぞくようがある。



一〇 内瀬ないぜ

○村島むらしま (高浜島)

ここにもいろいろな話が伝えられている。

① 白馬の瀧つぼで入水した朝比奈三郎あさひななさいぶろうは (船越の項参照)、川下へ流れていった。伊勢路の人々はかかわりになるのを恐れ、竹竿などで突いて下流へ押し流してやったが、内瀬の人たちはこれを拾い上げて村島むらしまへ

祀まつった。この罰で、伊勢路いせじの人たちは村島さんの祭りに来ると、「寒い、寒い」と言って震えるという。

② 『伊勢国誌草稿』は、ここに弁天べんてんの祠ほくらがあり、そこにかぶととよろいがあつたが、明治一一年九月の大波で流出したという。『穂原村誌』は、明治三〇年代に、鎗身そうしん、刀身とうしん、土器の破片等が出たと記している。

また、一隅いちくぐうを馬の塚といい、白馬を葬ったところとする。

③ ここに葬ほうむられるようになったいきさつについては、次のようにも語られている。戦いに敗れた三郎は、伊勢国へ来て、横輪から鍛冶屋峠かじやとうげへ出、伊勢路の古道を谷に沿って下り、一休みしては水を飲み飲み、瀬戸橋せとばしまでたどり着いた。そこでまた一休みひとやすみして伊勢路まで来たら、激しいオコリにかかり、それでもようやく「かはやしやま」の岩のところまでたどり着いたが、もう動けなくなってしまった。ここで苦しんでいると、通り合わせた村人たちはかかわり合あいを恐れ、相談して海へ流そうといかだに寄せ、川へ突き出してしまった。

いかだは「ゴジラ浜」（古宮の川辺）を通り、内瀬の村島むらしまに流れ着いたが、もうそのときは三郎は死んでいた。内瀬の人たちは、その死体をよろいを着けたまま、島の中央に丁寧ていねいに葬った（聞書）。

後になって大暴風雨のあと、雨に洗われて、よろいの一部が出てきたという。

○袖引そでひき

人里ひとぢやとを離はなれたところで、ここに古墳こふんがあり、袖引そでひきといわれる。この地名の由来ゆらいも次のようにさまざまに語られてる。

① 迫間浦はさまうらの人たちも、昔はよく内瀬の浜まで来ては、この洞穴どうけつで遊んでいたが、帰るところになって調べてみると、一人ずつ神隠かみかくしにあつていなくなることが多かった。人の話では、洞穴に入ってきて出ようとする、何者かに袖そでを引っ張られ、出られなくなって、そのうちに消えてしまうのだという。それで袖引といわれるようになった（聞書）。

② 洞穴には大きなへびがいた。そこでここを通る人たちが恐ろしくなつて、「帰ろうや」というと、必ずだれかが神隠かみかくしにあうので、無言で袖を引きあつて、帰りを促うながすようにしたからだ（聞書）。

③ 気味の悪いところなので、一人していると迷いそうにもなるので、お互いに袖を引きあつていなければならぬところからその名が付いた（聞書）。

ここには礮浦たけふらが小祠しょうしを祀まつっている。袖引の宮とか、上の宮と呼ばれるが、『南海村誌』によると八幡神社という。礮浦では一二月一八日、ここから「秘密の物」といって赤土を採とってくる。赤土はわらづとに入れて持ち帰るが、そこでの行動は一切無言いっさいむごんでおこなわなければならない。それで、用のあるときは袖を引いて外へ連れ出して話をする。そこから「袖引きの宮」と名が出た。

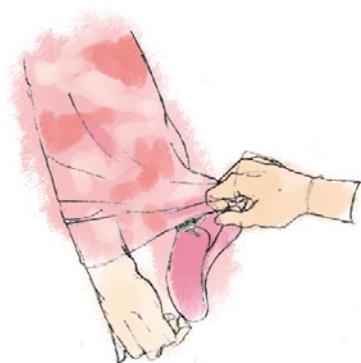
この赤土（秘密物）は、旧正月八日、岩屋薬師の命日に、竜泉院りゅうせんいんで大根判を作り、紙おうなつに押捺おさなつして各戸かっこに配る。各家ではそれを仏壇ぶつだんに収めたり、門口かどぐちにはって魔よけとする。

○水神池すいじんいけと源太げんた

昔、伊勢路川は今の浜の前をとおって、水神池すいじんいけへと流れていた。今よりはずっと大きく、底もはかり知れない深さをもっており、気味悪いところだった。ここに池の主といわれる「うなぎ」が住んでいた。雨の降る夜は童女わらわとなって、池の表面によく現れたそうだった。

その池のそばに源太という勇敢ゆうかんな男が住んでいて、ある夜に源太は夢を見た。

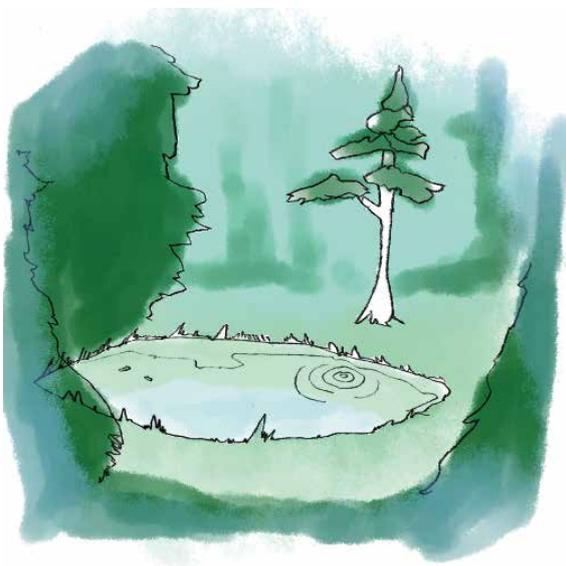
池の主が美しい娘の姿で現れ、「明日、鶴路山かくろやまに住む大きな毒グモが、水神すいじんを襲ってくるので、私一人だけでは太刀打ちたちうちできないから力になってほしい」と頼んだ。源太がうなずくと、「戦いになったらころあいを見て、



『源太ここにあり』と大声でどなってほしい』と言った。源太はもう一度うなずいたところで、夢から覚めた。翌日、約束の時がきた。その夜は、水神池の上を生臭い風が吹いて気味の悪い夜だった。源太は恐ろしかったが、約束をしたので水神池のほとりで待っていた。

そのうち夜もふけると、鶴路かくろの山の上で大きな目玉のようなものが二つ、異様に光り、にわか一面の黒雲くろくもがわき起こって、すごい速さで水神池へ襲ってきた。これに対し、水神池からは太い水柱みずばしらが立ち上がり、ここに黒雲と水柱が入り乱れ、大雷鳴だいらいめいとなった。かなり勇気のあった源太も恐怖のあまり、「源太ここにあり」というのを忘れてしまい、はうようにして家へ帰って寝てしまった。

翌朝はなにもなかったように水神池は静まり返り、朝日がギラギラと輝いていた。しかし、岸边きしべの繁みしげみのなかに、毒グモに食い切られた一斗樽いっとだるぐらいもある大きなうなぎの首がころがっていた。このことがあってから、源太の家には不幸が続き、ついに滅んでしまった。今では、源太の家の跡あとと井戸が残るだけといわれる。



一一 伊勢路

○石畳の宝

鍛冶屋峠の道筋の「石畳」に、直径一メートルほどの大松があつて、その下には、宝の入ったつぼが埋められていと伝えられ、伊勢路が減びるときになつたら掘り起こせと言われていた。

そこでこれを盗み出そうとした人があつたが、マムシやクチナワ（青大将）がたくさんいて、どうしても掘り出せなかった。

一説では、近くに白いレンゲの咲く泥池があり、そこから気味の悪い、怪しげなものがたくさん出てきて、怖くなって逃げだしたのだともいう。

この石畳の下では、正月になると金の鶏が鳴くのだと伝える。

○駒田

愛洲氏が西行谷（城山）に在城していたが、横暴な領主で、駒を走らせては田畑を荒らしまわっていたので、



そこを駒田というようになった。また、この近くの「馬屋ノカイト」というのは、この城主の馬が入り込めな
いように、村の人たちが垣を巡らせたので、その名が付いたという。

村人たちの怒りを持った愛洲氏はここを追われ、迫間に逃れて殺されてしまった（迫間浦の項参照）。その
奥方を万女郎といった（斎田の項参照）。

○隠れ谷

昔、検地役人が田畑の調査にやってきた。熊口のとまり岩まで案内し、「もうこの奥には田畑はない」とだま
したが、発覚を恐れ、この役人が田丸に帰る途中を、弓でねらって射殺してしまった。その人を榊原久太夫と
いう。

田丸では役人が帰らないので、取調べにやってきた。そこで村人たちは、その犯人をひそ
かに谷あいに隠し、食糧を届けるなどしてその生活を助けたので、「隠れ谷」といわれ
るようになった。

そのとき、タチバナの木を植えたが、大木に成長して近年までここにあったという。



○穴口

伊勢路の西、押淵おしづちとの境に大岩がある。この大岩の下の方に穴があり、これを穴口といい、魚が入り込むようになっている。ここへひょうたんを入れたら、それが内瀬ないぜの袖引そでひきの古墳こふん（これを井戸いどと称しょうしている）から出たという。

○行者山の天狗てんぐ

昔、伊勢路の行者山ぎやうじやまに天狗てんぐが住んでいて、なんでもできると力自慢ちからじまんをしていた。奥出の奥の田は、温坊山の麓ふもとを開墾かいこんしてつくった段々の田であるので岩が多く、村人たちは耕作に大変困っていた。

天狗の自慢話をたよりに、百姓たちが相談のうえ、天狗に田のなかの岩を残らず取り除けてくれるように頼んだ。親切な天狗は心よく引き受けてくれて、「あしたの朝、一番鶏いちばんどりの鳴くまでに間違まちがいなく取り除けてやる」と固く約束した。

百姓たちが仕事を終えたあと、さっそく仕事に取りかかり次々に岩を運ぶが、運んでも運んでも田の中の岩は尽きない。空も白みかけ、ようやくあとわずかとなったとき、大岩の立尾の岩と多滝谷たたきの岩を担になったが、荷

加減が悪く、そばにあった枕のような形の岩を添えて担ったところ、コロリところろげ落ちてしまった。

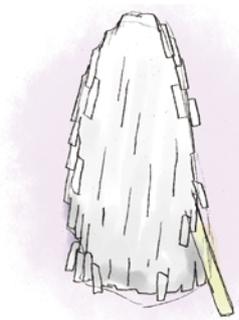
その時、コケコッコと鶏が時刻を告げた。百姓たちとの約束が果たせなかった天狗は、責任を感じてか、行者岩からその日限り姿を消してしまった。しかし、奥出の田は岩のない美田となった。川の真ん中の岩は長持岩と呼ばれている。

一二 齋田

○日踊山

山上に平坦で八畳敷もある岩石がある。太平洋からのぞむと、ちょうど、ヒヨドリが海上に浮かんだように見えるので、昔から『ひよどり山』と呼ばれ、灯台のないころは、この岩が船舶の目標となり、これを目当てに内瀬湾に入ってきたという。

ところが、大千ばつがあったとき、落合の滝で祈禱し、このひよどり石に上がって踊りをして雨ごいをしたことがある。そこで「ひよどりさん」といったのを、「日踊山」と聞き、それから誤ってそう呼ぶようになったといわれる（『穂原村誌』）。



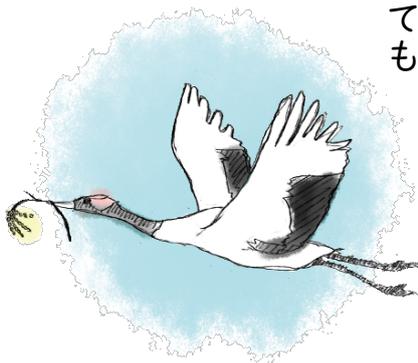
○大歳社

齋田に大歳社が祀^{まつ}られていた。今もここに石積みがあつて、鶴の墓という。この鶴は霊鶴で、昔ここに住まい、大歳社の使いで稻穂をくわえ、すぐ南の山を越えて磯部へ飛んでいった。鶴の越えていったところから、この山を鶴路岳と呼ぶようになった。

この鶴は磯部^{いそべ}で倭姫命^{やまとひめのみこと}に稻穂を差しあげ、それから齋田へ戻り、千年の寿を終えて、ここに祀^{まつ}られたという。また一説では、白鶴が一尺余りの大きな稻穂をくわえて飛んできて、その稻穂を大歳の地に落としていった。村人は、その穂は神様がくださったありがたい穂だといって種子をまき、子孫へ伝えることにした。また、その白鶴の霊^{たま}を慰^{なぐさ}めるために、穂を落としたところには小さな碑^ひを建て、その鶴がいつ来ても食べられるようにと、田に稻を植えて長く伝えるようにしたという。

○大歳社の池

明治の末、神社合祀^{じんじやごうし}がされるまでは、この池で齋田の雨ごい行事が行われ、齋田の寺の和尚さんが大般若経^{たいはんにやきよう}を転読^{てんどく}し、その祈禱札をこの池中に立てる風習があつた。



○万女郎淵

大歳社よりやや上流にある淵。

「マンジヨウロウフチ」がなまって、「マングラブチ」「マンジャラブチ」「マンニャラブチ」などといわれる。城山（西行谷）の城主愛洲内膳正の奥方万女郎が、永禄中、城主が北畠具教のために滅されたとき、身を投じた淵という。

女郎は上臈の誤りで、内膳正は伊勢路城主愛洲内膳正正武、お方はその奥方という。一説では姫君だったともいう。正武が攻められ、久昌寺で自刃したため、投身したといわれる。

また、次のようにもいわれている。すなわち、この女は伊勢路城主愛洲正武の奥方で、絶世の美人だった。伊勢路城は下村伊助が北畠国司から、「不落の城をこしらえよ」と命ぜられて築城したもので、正武は成人後に城主として迎えられたが、織田方の仁木某に攻められて落城し久昌寺に逃れて自決した。この奥方、お方はこの淵に投身して果てた。

○流れ着いた獅子頭ししがしら

齋田で大雨が降った。田畑をすっかり埋めていたが、朝日とともに引きはじめ不思議なことに、どこからともなくジロジロジロチロドンドンと笛と太鼓の音が聞こえてくる。

村人は音のする方へたどっていくと、釜の口（神勢工業のある附近）のヨシの中から聞こえるので、恐る恐る近づくと、立派な獅子頭が昨夜の大水で流れ着いていた。村人たちはそれを大切に運び、庄屋さんは地下中の人を集めて相談をしたところ、まず、持主を探すことになり、方々へ連絡した。ようやく持主がわかり、田丸在の野篠村のものであった。どろぼうがお金になるものと思い込み、盗み出し押淵まで運んで来たが、重いため川辺の草原に捨てたのが、大水で流れ着いたのであった。

知らせを受けた野篠村の人々が、はるばる山を越えて受け取りに来た。お礼を言い、獅子頭を持ち上げようとしたが、吸い着いたように重く、持ち上げることができない。力自慢の人たちが、代わる代わる試してもなかなか動かない。しかし、齋田の人が持ち上げると、軽々と持ち上がる。これは正直な齋田村の方々へ、神様が授けてくださったのだらうから、末永く大事に祀まつってくれ、と言って、野篠の村人たちは帰って行った。

舞方や囃方の知らない齋田の人々は、野篠村に出向いて教わって来た。それから、村に悪い病気や争いごとがなくなり、村はますます繁盛したという。



○弘法の足と杖の跡こうぼう つえ あと

弘法こうぼう大師だいしが、齋田さいでんの奥、神坂かみさか（鴻坂峠）あたりの道を歩いているうち、のどがかわいたので、道の近くの谷あいあいにに下りて水を飲んだ。今、そこに弘法大師が杖つえを突つつ立てた跡あとが残る岩があり、石神いしがみといわれる。

一説では、弘法大師が諸国しよこく回遊かいゆうのついでに伊勢国いせこく齋田さいでんへ入り、石神いしがみというところで身を清め、岩の上に立って、一心に念仏を唱となえているうちに、弘法大師の足と、持っていた杖の跡が、くっきりと岩に付ついてしまったのだという。これを弘法の足跡あしあとといっている。

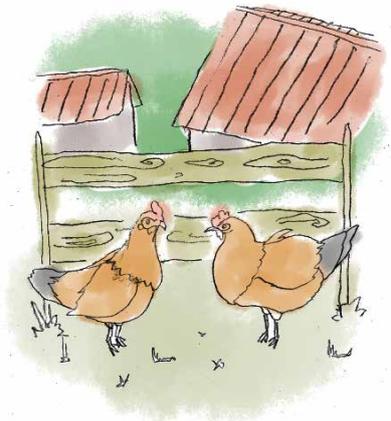


一三 始神はじかみ

○大火と引き白たいか ひきうす

三〇〇年ほど前の旧二月六日、始神はじかみに火事が起こった。なにぶん、風のある日だったので、二九軒の集落のうち、二五軒も焼け、たった四軒だけが残るといって大火となった。火事はかやぶきの屋根の家から出火し、と

なり合わせた三軒の家が一度に焼け落ちてしまった。山仕事をしていた人たちがそれを見ていたが、三軒とも一緒だったため、火元がはっきりしなかった。そこで、昔から、火元の家では引き臼の心棒しんぼうがなくなる、という伝説があったので、その三軒の家の引き臼をしらべてみたら、真ん中の家の引き臼の心棒が、やはりなくなっていた。



○石くよさん

始神の里の中心の辺りに、昔から「いしくよさん」といわれるものがあった。ここは小さな丘になっていて、石が積んであるが、その石の一つ一つに字が書いてある。

昔から、この前を通ると、腰の抜ける病にかかるといわれていた。そこで坊さんに頼んで祈禱きとうをしてもらってからは、よくなったという。

始神に「やまいめのオオカミ」が入って来ないのは、入口にこの「いしくよ」があるからだといわれる。



○おめきの森

昔、始神の入口に茶店があった。その横裏に、用水か飲料のために掘られた横穴があり、子どもたちはこうもりを捕ったりした。その上の山が墓地になっており、昔は物見台ものみだい（見張り場所）で、強盗や敵が攻めてくるのを見張ったところである。悪者が押し寄せてくるのが見えると、地下（村）へ、「賊が来たぞ！」と大声を出しておめいた（大声で叫んだ）ので、ここをおめきの森と呼んだ。墓地整理のとき、刀や槍やりの折れたのが出土したと伝えられている。

一四 押淵おしづち

○鬼ヶ城おにがじょう

ここにも多くの伝えがある。

① 『南紀徳川史』なんきとくがわしに、「当村の鬼ヶ城というところに大きな洞穴があり、昔、鬼が住んでいたと言っている。

これは元暦げんりやくのころに平家の落人がやってきて、この洞穴に住み着き、悪いことを重ねたので、洞穴の後方で殺されたという」と記されている。

② 『伊勢名勝志』いせせめいしよつしでは、昔、一人の賊がここに住んでいた。いつも度会郡のある村の市場に松苗を売りに行つて暮らしていた。ある日、この洞穴どうくつをのぞいてみたら、賊は人肉を食べながら酒を飲んでいて。これを見た土地の人は怪しい鬼だとし、酒に酔って寝るのを待って、周りに火をつけ、焼き殺してしまったと記している。

③ 二説とも、洞穴または洞穴の後方で焼き殺されたことになっているのに、里伝では次のように、もっぱら松阪方面で殺されたことになっている。

ここに住んでいた鬼は、この辺りの枯れた松の木から、ジンを取り、これを灯油代わりに売って暮らしていた。よく友人の六郎右衛門と松阪の中万方面ちゆうまへまで売りにいっていた。酒が好きで、ジンと交換しては飲んでいた。ある日、酒の肴さかなに懐中かいちゆうからつまみ出して食べているものを見たら、これがなんと赤子あかごの腕だった。これを見てびっくりした周りの人たちは、「こんな恐ろしい奴は、酒を飲ませて酔わしておいて、周りに薪まきを積んで火をつけ、火あぶりにして殺してしまえ」ということになり、とうとう焼き殺してしまった。

鬼は焼かれる直前に目を覚まし、「金の鶏きん にわとりと打出うちでの小槌こづちが惜しいなあ」と一言いって死んだという。それから以後、大晦日の晩になると、槌つちの音と金の鶏の鳴き声がするようになった。

一説では、「金のチャボ（鶏）と隠れみのをやるから助けてくれ」と言ったともいう。この金鶏は三界坊に埋めてあるという。

焼かれたところは、草も生えなかったが、今は竹やぶになっているという。

④ 『勢国見聞集』では、『押淵の鬼』として次のように記している。

中万ちゅうまの市場では、毎年、市の日になると、行方知らずの人が出るが、原因が分からなかった。

ある年、赤子の手をかじりながら、酒を飲む二人を見つけ、捕えようとしたら逃げ出した。一人は捕えられたが、一人は民家に逃げこんで出てこない。人を食うような者なので、ふみこむこともできないから、焼き払うことにした。

そこで捕えられた者が、「おれは押淵の六左エ門という者で、あれは押淵の岩屋に住む木虫という人鬼である。人を取って食う奴だが、どうか代わりの物をあげるから助けてやってほしい」と頼むので、鬼のことであり、後のたたりを恐れて、これからは人食いはやめよとさとして帰してやった。

それからは、市の日に人が居なくなるようなことはなくなった。押淵には今も鬼の岩屋があると、松阪に奉公に来た人も語っていた。



○白瀧

袴腰の山中には、昔から白蛇が住んでいた。ところが嘉永元年の春から、押淵内ではいろいろな不思議なことが多く、家々の鶏が宵鳴きをしたり、また、白蛇を見て両眼がつぶれた者も出てきた。

しかもある夜、夢のお告げがあったので、これを白瀧権現としてお祭りしたところ、不思議な事柄が急にやみ、祈禱をすると靈験もあるというので、近辺の大評判となり、山田川崎方面からの参詣人もあるほどになった。ついに慥柄の大庄屋から世間の人を惑わすといって、差し止めの達しがあったので、お参りのことはやんだが、小祠は残った。

このとき、永福寺では白瀧権現の神札を発行したほどという。

○長峰山の胎内仏と塚土居

押淵沖田の中電変電所の附近に塚土居というところがある。昔、長峰山清涼寺という寺があり、志摩の青峰山正福寺と並び尊ばれた寺で、本尊は一寸八分の胎内仏であった。あるとき、盗賊に盗まれ、八方へ手をつくして盗賊を捕らえたが、金の仏像は既に売り払われて、とうとう戻らなかった。



捕らえた賊を沖田の下手の原で殿様が首をはねて処刑した。その場に首を埋め、塚とした。原がだんだんと田になり、塚に土居（土堤）ができたので、塚土居、またの名を処刑場と呼んでいる。この土居の木にさわると、盗賊のたたりで「おこり」が起こるといわれている。

一五 迫間浦

○坊主岩

夜泣岩よなきいわともいう。橘氏たちばなしが迫間浦にやって来て、石谷平兵衛氏を頼った。後に村民を従えて迫間浦の領主になり、今の浅間山の地に城を構えたという。

あるときの戦いで手傷を負い、奥座敷おくざしきでひそかに養生ようじょうをしていた。そこへどうして知ったのか、道清氏どうせいしが心配みまして見舞みまいにやってきた。ところが、それを敵がやってきたものと勘違いをし、槍やりを持って追い駆け、坊主岩に追い詰め、ここで突き殺してしまった。後、橘氏はその娘を道清氏に嫁かして和睦わぼくしたという。

道清氏の死んだところへ石を建てて祀った。道清氏は穏やかな人柄で子ども好きだった。そこでここへ洗米

を供え、しめ縄を掛けて拜むと子どもの夜泣きを止めてくれるという。

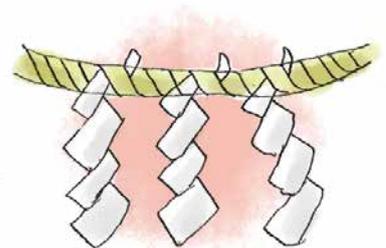
○西之菴

ここには次のような話がある。

①永禄年中、愛洲内膳が織田信長に内通したので、多氣国司北畠具教が田丸を使って攻めさせた。内膳は迫間浦へ逃げてきて、西之菴へ忍び隠れた。しかし、頼み込んだ人々の功もなく、見つけ出され、小切間小四郎に討ち取られた。

②天文二〇年亥二月、小切間新五良という者が愛洲内膳という者を迫間浦へ迫ってきた。内膳が西之菴の下屋に隠れていたのを、小切間は槍で突き殺した。今は石塔がある。

③愛洲内膳は迫間浦に逃れ、路傍で洗濯をしている老母を見かけ、隠れ場所を頼み、「もし危険を免れたら、後で褒美をやる」と言った。老母は承知して西之菴の下屋（床の下）に愛洲公を隠した。しかし、愛洲公の



周辺にはいつも鷹たかが舞まったので、これを目当てに追いかけてきた小切間小四郎が、老母に内膳の行方を尋ねた。老母は初め知らぬと言っていたが、小四郎が刀に手をかけ、深く責めながら問うたので、やむなくその隠れ場所を白状はくじょうしてしまい、ここで内膳は小四郎の手にかかって殺されてしまった。

内膳は死に際に目を怒らせ、老母に向かって、七代の間、たたってやるぞと言って死んでいったという。

一六 礫浦たぎらふら

○礫石

字東出あぎに、天照大神の礫石という四方七寸ばかりの円石が祀られていた。五本指の形のついた霊石で、あちこちにも知られ、船乗りたちの信仰が厚かった。これに祈いのれば、天候順調てんこうじゆんこうで漁獲ぎよかくもあるというので、出漁のとき、また、貨物船の出帆のときは必ず参詣さんけいしていた。

これを「五手ごての石いし」といい、今は八幡神社はちまんじんじやのご神体として祀まつられている。神社の合併前は井戸のあるところに祀られていた。そこで子どもたちがこの石をころがしているのを見て、そんなものを動かしてはならんと言意した人があったが、その人はかえって病気になってしまったという。

この石は天保元年ごろ一時盗まれた。石を載せた船が動かなくなったので、これを海中へ捨てたら動くようになった。あとで海から「五手の石」が出てきたので、これが盗まれた石だということになり、また祀られるようになった。

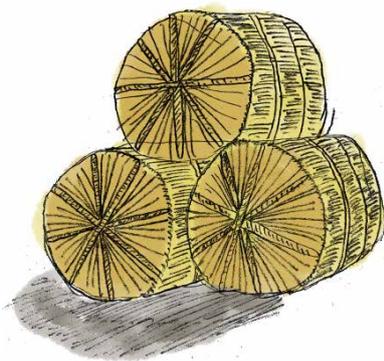
また、この石については、次のようにもいわれている。

権現神社のもので、海に捨てられた後、ニワの浜に波で打ち上げられていたという。また、石を積んだ船が台場の沖まで行ったら、船は進まずに後へ帰ってきた。たたりだろうと思い、港へ帰って石を戻したら船は走るようになった。

○オーメ松

礮浦の港の入口の小島にあった老松だったが、昭和三五年の伊勢湾台風で倒れてしまった。オーメ松とは「思い出松」のなまったものという。

帆船時代は礮浦は出船入船でにぎわい、御城米を積んだ千石船なども、しきりに入港していた。そのころ「ハシリガネ」と呼ばれた遊女などもいたが、彼女たちは船が出帆するときは、小舟を出してこの小島のあたりまで見送りしていた。だからこの松は、送る者、送られる者にとって、思い出の松となってその名が付いたのであろう。



○浅間山の石

礫浦の村が立ち行かなくなったら、浅間山の石の下を掘れといわれる。この石の下には、宝や小判が埋められているのだという。ここには、町内最大の古墳がある。

一七 相賀浦

○局ヶ頂（鋸山）

昔は鋸山と呼ばれ（明治九年地図）、局ヶ頂が俗称だったのに、今では局ヶ頂と呼ばれ、古名は忘れられているほどである。

建久年代、源平の合戦で滅亡した平家の一族が相賀竈に逃れた。主人の奥方、すなわち、お局をこの山にかくまって、外襲の憂いを除いたので、その名を得たという。

また一説では、平維盛の庶子岸上行弘が建久年代の戦いに敗れ、その子孫が相賀竈に逃れて住みついた。「局ヶ頂」は平家の奥方、すなわち、局を祀ったものという。

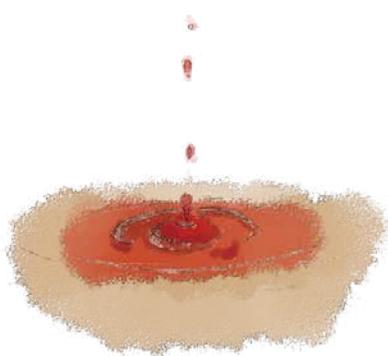
また、当地へ落ちてきた平家の残党が、ヨナゴの浜で塩焼きをして暮らしを立てていた。浜の背後の山の頂上には、一族のうちのお局さんがいた。ここは四方八方が見渡せるところなので、敵の来るのをたえず見張っていた。

一族の面々もお局たちも、わびしい暮らしをしてその境遇を悲しんでいた。ヨナゴの浜の石や砂も、これからの人々に同情して、夜もすがら泣き続けたという。そこでこの浜の石を採ってくるのとたたりがあるといい、堅い禁忌になっている。

○赤石の鼻

鼻とは先っぽのことである。熊野の岩屋に住んでいた鬼が、沖から弓矢の名人に目を射られ、相賀まで逃げた。

そしてその目から滴る血潮で、このあたりが赤く染まってしまったので、「赤石の鼻」といわれるようになった。この鬼は、あとで阿曾の方まで逃げていったという。



○相賀の人柱ひとばしら

元屋敷もとやしきの波止場の普請ふしんは、たびたび大波に妨げられて難工事を極めた。そこで人柱を立てることにし、それを波止めの両端に祀りまつ、堤守神、または「アイヌノスツツミマモラセノカミ」と唱えた。明治三年の大津波までは、一小祠があったと伝えられる。

○水難者のたたりすいなんしや

船乗りたちが、沖合に流れる死体を引き揚げてみると、高野山こうやさんに寄進する大金を身に付けていた。船乗りたちはその大金だけを盗み取り、死体は水葬し、帰港してからその金を分配してしまった。ただ、その中で、カシキ（水夫）をしていた一人だけが分配にあずからなかった。

ところがその後、その船が難船なんせんし、海のもくずとなったのに、不思議に「カシキ」だけは助かった。「これは高野山の罰があたったのだ」「水難者のたたりだ」など、陰口かげぐちされたので、その船乗りたちの遺族は、その水死者の霊の供養として、寺に涅槃像ねはんぞうの画を寄進きしんした。



○黒崎の岬 くろさき みさき

波打ち際に二つの洞穴がある。中には砂の広場があつて、石仏さんが祀まつつてあるといわれ、潮の引いたときにお参りしてきた海女あまのおばさんがいたそうである。ただその海女さんに会った人はいないという。

一八 田曾浦 たそうら

○城山コモンソの松

いつのころか、田曾の城山の城主に仕える小姓こしょうがあつた。日ごろは忠実な者であつたが、どうしてか、ふとして城主の不興ふきようをかい横死おうしを遂とげてしまった。後になって、その無実を知つた城主は、その小姓こしょうを哀れみ、墓所に松を植えて菩提ぼだいを弔とむらつたので、その松は「子小姓松」と呼ばれたが、いつしか転訛てんかして「コモンソ松」となった。その松は明治の中頃まであつた。三本松のところにあつたが、その三本松も長く入船の目標であつたが今はない。

その三本松の真ん中の木の下には、女の首が埋められていた。ふとしたことから罰を受けたので、夜になると幽霊となつて出たともいう。



○アチニワの姫塚ひめづか

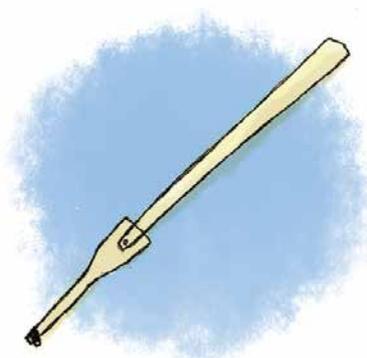
字アチニワのたんぼの中に一つの塚があった。昔、お姫さまの首を洗って埋めた塚で、姫塚ひめづかといった。近くに坂があり、トンダの坂といい、首が飛んだのでその名が出た、と村人たちは伝えている。

○御崎神社みさきじんじや

田曾の三崎の海中にある島を竜宮島ともいう。

『宿田曾村誌』によると、これは、豊玉毘売命とよたまひめに漁具まづを奉る者が、この御前島にお供えをし、海の幸を祈ったのがもとであるといわれる。ある伝えによると、彦火之出見命ひこほほてのみみことが龍宮の豊玉毘売命をめとり、塩屋しおやと浜島はまじまとのあいだに住み、鷗鷺草葺うがやふきあえず不合尊あみことを生んだのだ、とある。この島に櫓ろうなどを当てる時、必ずたたきがあるといい、村人たちは恐れて、海藻かいそうなどもここでは採とらない。

一説では、豊玉毘売命とよたまひめが火遠理命ほおりのみことに会おうとして海神の宮からやってきたが、途中、ここに立ち寄ったところとも伝える。以前は、フクトノクチと呼ぶ潮柱の立つ場所があった。



一九 宿浦

しゆくうら

○宿浦の薬師さん

昔、竈かまに小平という貧しい漁師がいた。ある日、いつものように小舟で沖へ出漁したのに、晩になっても帰って来なかった。その日は、ことに海上も穏おだやかな日だったので、難船なんせんは考えられず、郷民ごうみんも不思議に思いながら、八方探したものの、ついに行方はわからなかった。

小平には、若い妻と一人の乳飲み児、そして年老いた母があった。妻は悲嘆ひたんのあまり乳がとまってしまった。老母は毎朝早く海辺に出て、小平の無事を祈っていた。

ある朝、桂島の魚江のあたりを見ると、異様なものの漂うのを見つけた。早速、これを村の人たちに知らせ、田曾浦の浜へ揚げようとしたが、一向に揚あがるうとしない。手をかえて宿浦の浜で揚あげようとしても揚あがる気配はない。観音洞へまわして揚あげようとしたが、千鈞せんきんの重みが加わり、ますます揚あがるうともしない。皆が途方に暮れているところへ、小平の老母がやってきて手をかけたなら、不思議にも楽々と揚あがってきた。見ると薬師像だった。

皆はさっそくに堂を建ててこれを安置した。そしてこれは小平の老母の厚い仏心の賜物たまものだとしたが、そのおかげか、若い妻の乳も日ならずして出るようになった。この薬師像は、このように感応いちじるの靈驗著しく、一名、

乳薬師如来と称され、皆の崇敬を集めた。

ここに侵食されて穴のあいた岩があって、観音洞といわれた。観音洞とは薬師がここに漂着したので、その名が付いたといわれるが、埋立てのため今はもう見られない。

○行者松ぎようじやまつ

花岡崎にある一岩を「イヲエノハナ」といった。ここに枝幹とも妙趣のある老松があった。この木の下に役行者が祀ってあったので、この名が付いた。



南伊勢の
民話

出典

- ・南島町史（一九八五）
- ・南勢町誌（一九八五）
- ・南勢町誌（二〇〇四）

南島町町史編集委員会
南勢町誌編さん委員会
改訂増補南勢町誌編纂委員会



南伊勢の民話

2021年 3月 発行

編集発行 南伊勢町教育委員会
題 字 服部 一孝（上下水道課）
挿 絵 植村 泰士（水産農林課）

南伊勢の
民話

